

超越

苦惱

我らはすでに大地の上に生れて来た。

そうして万人が万人、厳密な意味で言えば、皆異った境遇に生れて来た。

何の力が左右したのか、野口英世博士のような頭脳を持つて生れた者もあれば、私のような凡人の素質を持つて生れた者もある。

同じ親の子に、冬でも二三枚着ていても風邪さえひかぬ子もあれば、何枚着せても一寸したことにさえあてられるような蒲柳の質の子もある。

使つても使つても使いきれぬ富の中に生れた者もおれば、私のように水呑み百姓の子に生れて、借金から借金に困つた父を持つた者もいる。

かくして我らには、生れながらにして貴賤・貧富・強弱・智愚の差別ある性質と境遇とを付けられてあつた。

生れた時は完全な体を持つて生れて来た女があつた。母親の不注意で爐の火におちて顔を焼いた。小学校に行きはじめる前から村の子供の集りでは「お化け」とあだ名をつけられた。学校でも何かお友達の御気嫌をそこねた時には、すぐ「お化けさん」と嘲笑された。

娘時代になつた。美というものの片影だに有たぬこの子は悲観しはじめた。やがてこの子は世を呪いはじめた。両親を呪いはじめた。

この子は果して呪い死にしているのだろうか。またそれだけしか道はないのだろうか。

同様の原因で跛びつこになつた者もある。聾ぶんぼになつた者もあれば、片手・片足の者もある。

小学校ではお友達だつた。

机をならべて学んだ者が、幾十年かたつた。頭脳がいい悪いのちがいがいから、一人は中学校の試験もうまく行かない。私立中学・私立大学、やつと月給五十円、今でも古ぼけた机で安月給に貧乏している。友人はとんとん調子に、県中・一高・帝大……そして今は要路の大官になつている。この頭の悪い男は、一生暗い心のまま駄々として暮さねばならないのだろうか。

幸福に育つた娘があつた。女学校を卒業して、普通の女としての教養を受けて後、普通の仕方結婚した。幸福であつた。その間に三人の子供が出来た。

しかしある日この女の上に最大不幸が訪れた。愛する夫が汽車の転覆によつて惨死した。それから間もなく一人の男の子が病死した。女の子二人連れて残つた女、いかなる哲学も科学もこの夫と子供とを返してはくれない。

人間の一切の造作がこの夫と子とを取り返し得ないならば、この女は救われないのだろうか。

極めて奇矯な性格の女があつた。彼女は普通人が眠る時に起きていることもある。普通人が笑ふ時に泣くこともある。自由に出、自由に入る。彼女は何時も彼女の周囲から排斥せられた。

彼女がその自分の性格に気がついた時は、彼女は暗い世界へ走りこんでいた。彼女は決して、もとの娘にかえることも、十八の若きにかえることも出来なかつた。やがての後、彼女は彼女の母の血そっくりの流れを自分の上に見た。彼女は生みつけた親と、入れてくれない社会を呪つて、悪魔となろうとした。

彼女はこの境遇の中で呪い死か狂い死か自暴自棄以外に何もものも与えられないのだろうか。

同じ人間でありながら家柄というものがある。更に血統ということが重んぜられる。

広島県の北部では「犬神つきの家」という迷信がある。一度この「犬神つきの家」ということになれば、結婚してくれる者がない。迷信だとさえ知らない。知つていても子孫永久の不幸を思つてどんなことがあつても結婚しない。もしその疑があると云われる所と縁組してさえ、兄弟親族すら捨てて他人となる。

こうした家に生れた子、地団駄踏んでもこの幽鬱をとり去ることは出来ない。あらゆる富、あらゆる犠牲、時には一家路頭に乞食してもいい、この汚名が去りたい、とはある男の告白であつた。水平社問題で泣いて訴えた女の心理もこれと同一である。

果して彼らは呪つて泣いていればいいのだろうか。

2

万人には死が来る。これほどはつきりした真理はない。賢明なるお方には死は何でもないことかも知れない。しかし、釈尊すらこの老・病・死の前には、富貴も地位も、栄華も一切が問題でなかつた。

何を以て最も重大な問題、最後の問題とするかは、その人の勝手である。しかし生死の問題が一度我らを占領する時、生きている事実を全宇宙大に重要視し、死を以て我らの全価値の滅亡を感じ、死によつて滅亡せざる永遠なる価値を見出さんとする者にとつては、この生死の問題は、最も深刻に我らにせまってくる。

我らはこの願わない死という必然の矛盾の前に立つて、悶死するより外は許されないのであるか。

以上は人間生活の上に現われた、いわゆる苦悩の一二の例にすぎない。苦悩に生きる人間は自暴自棄に陥る場合もある。世を呪い人を呪い、暗いこの呪いの中に死んでゆく者もある。我らはいつたこの苦悩のただ中に如何に生くべきであろうか。

国家社会の改造

我らの苦悩はどこより生れるか。

「それは客観―社会組織から生れるのである。」

それは社会科学の教える答である。我らはこの中に含まれたる真理性を認める。左に引用するのは後藤静香氏の帰結の中の一節である。

「学問は誰がすべきものであるか。この問いに答える前に、も一つ尋ねる。音楽は誰が学ぶべきものであるか。」

「音楽の才能ある者が音楽を学ぶ。数学の才能ある者が数学を学ぶと同様である。」

「然らば一般的に尋ねる。学問は誰がすべきものであるか?」

「もちろん頭脳明晰なものが志すべきである。」

「異存はないか。」

「あろうはずがない、頭の悪い者は悪い様に他の道を選べばいい。」

実に賢明な大胆なる解答である。世の中がその通りになつてゐるならば、何等の問題もない。しかしながら、一度社会の実相を見よ。大学に専門学校に、否中学や高等女学校さえ、いくら頭脳が明晰でも入り得ないではないか。反対に、ある人々は、それが全然無能でない限り、専門学校にも、大学にも、自由に学び得るではないか。

学問がされるかされないかは、頭の問題ではなくて財力の問題である。貧乏人の子にそろつて無能力者が生れ、そろつて智的欲望が乏しいならば、それでもよからう。しかし実際は、かえつてこの反対で、貧乏人の子の方が頭脳明晰であり、智的欲求が熾烈な場合が多くはないか。金持の息子には、大学で学びながら、カフェーや芝居に熱心な連中がある。一あるというよりも多いが、貧乏人の子は、ただもう勉強したい一方で、これがためにはいかなる犠牲を払つても苦痛としないのである。

金というものが、学ぶための大切な資格となつてゐる社会は、何としてもまちがつつてゐる。如何に弁解しても、その程度の国家は文明といひ得ない。

英才が自由にその才能を伸ばされる道を講ずる。それが国家の役目である。金のあるものは、資本を出しあつて私立大学を設立し、万金を払つて良教師を招き、金のないものの為には、国家が官立の大学をつくり、無月謝で―ただし頭脳のいいものだけに学び得る道を開けばいい。専門学校、然り。中学、然り。女学校、然り。幼稚園、然りである。

しかるに世の実際は全然これと反対になつてゐる。人間が考えない動物ならそれでよい。人間がみんな馬鹿ならば、それでよい。人間が、真理の前に臆病ならばそれでよい。しかし人間は考える。人間がみんな馬鹿ではない。真理は実現されてこそ真理であり、実現されてこそ正義であるという位な理屈は知つてゐる。

「凡そ物、平を得ざれば鳴る。鳴らざるを得ない。」

救いは実に明瞭な簡単な帰結にあつた。

共に食ひ

共に働き

共に学び」……………(希望八巻一号)

こうした問題は、食ふことにも働くことにも楽しむことにもいい得る。それは単なる主義や思想やだけの問題ではなくて、人間の道として考えねばならぬ問題である。我らの苦悩が社会組織の上から生れて来ることはうなづけることである。

この問題を解決しようとするのが、現代の無産運動である。学ぶことどころか食うにも困るといふ問題が基調である以上、ことうした運動が、急流のような勢いで発展するのは当然である。我らはまことにその健全なる発達を切念せざるを得ない。我らは一国民として「民心を倦まざるしめんことを要す」との明治大帝の大御心を礼して、日本が真の文化国になることに進まねばならない。それはもちろん政治の問題である。一市民として国民としてその運動をさまざまにばかりか、合法的に参加しなければならぬ。それは新しい時代の道徳である。

三毒

積尊は食えるとか食えぬとかの問題よりも、もつと根本的に生死流転の根本を無明だと言った。無明とは惑といひ、痴という、共に智慧のない相である。その無明より貪欲が生れ、瞋恚が生れる。食欲とは人に対する愛欲であり、名利と物質に対する欲即ち権財欲である。愛欲と権財欲、それが満足されない時、瞋恚をおこす。物質と愛欲とは人生の二つの方向である。この愚痴・貪欲・瞋恚を三毒の煩惱と言った。我らが地獄・餓鬼・畜生の世界にさまようのはこの三毒によるのである。

食うに困るが故に罪惡ををかす者もある。しかし富める者は罪惡を犯さないといふことはない。むしろ大仕掛の罪惡は地位あり財産ある者によつて行われる。彼らは貪欲なるが故である。貪愛を超えない以上いくら与えても人は満足しない。更に新聞記事の半ばは愛欲の醜状である。人は時に物質よりも、人情關係に於いて、より以上の苦惱を持つ。

人間の心にこの三毒の煩惱がある限り、たとえどんなに富を所有させても満足するものではない。

「汝らを苦しめる者は、汝らの三毒の煩惱である。」とは積尊のみ教である。積尊はまさに所有欲を棄てて生きるべきことを教えられ、「無一物中無尽蔵」を説かれた。即ち心の改造をとかれたのであつた。

高位高官堂々たる生活をしつつ何故にいまわしい事件を起こし、国民を裏切つてまで不正の金を取らんとするか。彼は無明に動かされ、貪欲の心に使われたのである。渴しても盗泉の水を飲まぬが人の人たる道である。決して彼らは生活条件によつて強いられたのではない。彼自身の責任であり罪である。もし、要路の大官が万人おれば万人悉く皆、かかる不正を働く者なれば、人の罪惡は客觀よりのみ生れるといおう。財でなければ地位、地位でなければ名誉を得んとする。無明煩惱に起因する。責任は断じて彼自身にある。

宗教の使命

我らが生きるためには氣に入らぬ社会・環境が限りなく我らをとるかこむ。我らはそれを改造したい。まことにそれを欲する。心からそれを望む。人類の文化の向上はそこにあるのだ。

しかし考えてみなくてはならない。我らはいったいその時を何時まで待てばいいのだ。もし我らの生の歡喜がそうしたことによつてのみ生れるならば、我らはそれを待つより外はない。

そうして我らはある時間の彼方に彼岸をおいて悩むことより外に与えられないのだろうか。何時来るかわからない時間上の彼方をたのんで生きることのみが許されるのだろうか。

釈尊がにらんだ世界、そうして体得された世界、親鸞聖人が「慶ばしき哉心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」と言い、信樂とは「眞実誠満の心なり……：歡喜賀慶の心なり」といつた世界は、不満足であり、不自由であり、濁悪であるままの現実に即して、今の今、見出される救いではなかつたか。

その世界にも彼岸はある。しかしその彼岸は、一定の時間の間かかつて地上を改造して後得られる彼岸ではなくて、深く現実に根ざしつつ、しかも現実を超絶せる彼岸である。現実に即せる彼岸である。そうした彼岸と現実との問題を、出世間の問題と言われ、地上だけの問題はこれを世間道と言われた。この出世間道は今日我らには何ら用事のないことであろうか。

と言つて私は、世間道としての社会客観の改造ということが不要だということではない。まことに社会が安らかならざる状態にあることはいいことではない。いい社会を実現さすために努力しなければならぬ。

しかしそれだけでは我らは満足せられないといふのである。行きづまつた現実であればあるだけ、息のつまるような社会であればあるだけ、我らには、いよいよこの世界からの超越を憶う。

自由な平等な天空に呼吸したい。仏教の浄土とは、無為の世界・自然法爾の世界・安養界と言われて、差別の相對界の背後にこの世界を認め、そこへの飛躍を教えられた。差別界にのみ囚われるものは凡夫であり、この平等涅槃界に逃避する者は小乗である。大乘の理想はその、絶対平等の眞如界の呼吸に蘇つて差別界に生きてゆくことであつた。

親鸞聖人が

「超世の悲願ききしより 我らは生死の凡夫かは

有漏の穢身は変らねど 心は浄土に遊ぶなり。」

と言つたのは、彼のこの現実に即せる超越を歌つたものでなければならぬ。宗教が人生に生れて来るのは、こうした願があるからではあるまいか。

病氣がある。我らは、病院と医師と医薬と、それらの限りなく発達して行くことを衷心希うものである。そうしてそれに貢献して下さつた方を人類の大人として尊敬することもなすべきことである。しかしながら我らは、その医薬も病院も美術も、生きとし生ける者の生命を遂につなぎとめることの出来ないことを知る。そうした時、我ら是我らの生死より解放せられて動かざる心に死を受け取りたい。これ親鸞がこの人間衷心の願を受けて、信を「長生不死の神方」と言つた所以である。

我らは決して人間のあらゆる文化の事実を拒むものではない。しかしながら、それを認めつつ、参加しつつも、猶、最後の救い、最後の立場、親鸞のいわゆる畢竟依とすることが出来ないのである。宗教の世界はここにその使命を持つのである。

超越

一度失った足、幼い時焼いた顔、それはどんなにしても再び取り返すことは出来ない。愛する夫や、子供が死んで行つた。どんなにした所で帰つては来ない。

過去の暗い罪悪・取り返しのかぬ過失・前科・失はれたる処女・老いゆく年・病弱な体・不治の難病、それらは何によつても取り返されない。

これを書いてる最中にも、六七軒先の家には三つになる子供を一日の病でとられた。家の者すら見送らないで葬式屋が死体だけを持って行つた。一家は断腸の思いであろう。

泣くのは愚かなことだ。死とは要するに肉体の細胞が機能を失つて元素に分解されるのにすぎないのだ。子供が死んで泣くのは、科学的認識が足りないことから来るのだと、素朴的唯物論をふりまわされた所で解決にはならない。性格によつて、あきらめられるかも知れないが、誰にでもあてはまることではない。

そうした場合、多くは宗教の天地に走る。何かの意味において満足が与えられなければ生きられないのだ。

人間は誰でも、自分の苦悩が一番大きいものだという感を持たしめられる。そうしてこの苦悩さえなかつたら、他の苦悩なら何でも受け得るのといった形で現われ6る。我らはこの苦悩に勝たねばならない。

自分の身体の不具を呪つた人がやがて、もつと大きな意義と価値を信念の中に見出した時、今までの呪い、暗黒から出て、微笑し、立上つて更生せる人をあまりに多く知りすぎる。

人生とは単に生存することではない。無限に価値づけ、意味を見出すことである。我らは、我欲なる存在である。その我慢我欲の存在が、時には命すら投げ出すことがある。それは使命を自覚した時である。

超越とは生きることの逃避ではない。こえるとは、反くことではない。よく人生に随順せんがための超越である。